

ティワート (Devin J. Stewart) の指摘しているようにスンナ派との相互関係の中で構築されるものである [Stewart 1998]。それは同時に議論がウェーバーのカリスマ的支配論の俎上に載せて展開されていることに関する問題でもある。評者は 7～8 世紀のシーア派内の混迷が予定調和で語れないダイナミズムをもっており、そこに 12 イマーム派がもつ一つの面白みがあったと考えている。

そのことは逆に、著者が 12 イマーム派に傾斜することで、評者の予期しなかった、同派内部の権力構造の展開という面白さを描き出したといえる。著者は従来の研究では、イマームの弟子、あるいは言行の伝承者と考えられていたリジャールを、「近臣者」と考えることで、新たな同派内の権力体系を示そうとした。その意味で本書は、イマーム存在時の歴史的な権力構造を明らかにすることで、後代の同派における法学者による権力構築過程を説明する新たな解釈を生み出したともいえる。

このような歴史的な権力構造が明らかにされることは、歴史を越え、現代の 12 イマーム派における権力構造に十分に関わる問題として提起している。現在の同派では、数十名の法学者がマルジュウ・アッ=タクリード (marjī' al-taqlīd) と呼ばれる法学権威である。法学権威は、信徒にとって、イスラーム法の権威として、信仰生活の行動様式の模範となる存在である。またイラン革命で示されたように、時に革命に至るほどの包括的な権力を有する存在となる。何故彼らがそれほどまでの権力を有するようになったのか、あらためて本書はその問いを生々しくも、率直につきたててくる。

参考文献

- ウェーバー, M. 1954 『権力と支配』 (濱島朗訳) みすず書房.
——— 1962 『支配の社会学Ⅱ』 (世良晃志郎訳) 創文社.
オットー, R. 2005 『聖なるもの: 神的なものの観念における非合理的なもの、および合理的なもの
とそれとの関係について』 (華園聡磨訳) 創元社.
Crone, P. and M. Hinds. 1986. *God's Caliph: Religious Authority in the First Centuries of Islam*. Cambridge
& New York: Cambridge University Press.
Stewart, D. J. 1998. *Islamic Legal Orthodoxy: Twelver Shi'ite Responses to the Sunni Legal System*. Salt
Lake City: University of Utah Press.

(黒田 賢治 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

al-Sayyid Yūsuf . 1999. *Jamāl al-Dīn al-Afghānī wa al-Thawra al-Shāmīla*. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣrīya al-ʿĀmma li-l-Kitāb. 255pp.

ジャマールッディーン・アフガーニー (Jamāl al-Dīn al-Afghānī, 1838/39-97) は、今日のイスラーム世界におけるイスラーム復興運動の思想的な原点に位置づけられている。彼は、19 世紀後半のイスラーム世界で、西洋列強による帝国主義的な植民地支配に対抗するため、イスラーム諸国の連帯と伝統的なイスラームの革新を唱えた。前者を汎イスラーム主義、後者をイスラーム改革主義という。この二大思潮は現代のイスラーム復興運動に引き継がれ、発展を遂げてきた。そのため、彼

の存在への言及なくして、今日のイスラーム復興現象は思想的に語りえない。実際に彼は、洋の東西を問わずイスラーム復興運動が議論されるとき、たびたび言及されてきた。他方でアフガーニーには、その生涯にわたる行動と思想をめぐって様々な推測と解釈が錯綜している。その一因は、出自や宗派、思想といった、基本的な情報が不鮮明なことにある。本書は、激しく議論が戦わされるものの未だ十分な解明に至らぬアフガーニー像に、現代アラブ・エジプトを代表するイスラーム著述家が焦点をあてた、最新のアフガーニー研究書である。

本書は全体として7章からなっている。1章「生涯」で彼の出自や宗派、信仰の問題を精査したのち、2章「自由の希求と専制支配への抵抗」で、知的革新と理性の行使、イジュティハードの奨励や西洋文明の吸収の必要性といった、生涯にわたる彼の思想のモチーフを明らかにする。3章「カーブルにおける活動」では、アフガーニーがアフガニスタンやトルコ、エジプトやインドといったイスラーム諸国を精力的に遍歴し、各地の政争に関与したことを指摘する。4章「資本主義、社会主義、フランス革命」では、西洋近代の政治思想及び事件に対するアフガーニーの賞賛とそれに表裏する疑義を明らかにする。彼が、自由・平等・博愛を説く進歩的な近代啓蒙主義に対して素直に評価を寄せる一方、それを謳う西洋がなぜ非西洋に対して帝国主義的な侵略と植民地的な支配をおこなうのか理解できず、深い苦悩を抱えていたことを指摘する。5章「パリにおける固き絆の段階」では、フランスのパリにおける政治結社「固き絆」の創設と同名のアラビア語政治新聞の刊行を果たしたことを、その記事の一部を参照しつつ明らかにする。西洋近代に直面したイスラーム世界がいかに対処すべきかを説いたこの新聞こそ、アフガーニーの名をイスラーム世界全体に轟かせたのであった。6章「アフガーニーと汎イスラーム主義」では、トルコのイスタンブールにおける晩年の政治活動を取り上げる。そのなかで、アフガーニーがオスマン朝スルターン＝カリフを頂点とするイスラーム世界の統一的連帯を唱えたことを仔細に示す。7章「アフガーニーとアラブ性(‘urūba)」では、反植民地主義を筆頭にアフガーニーの思想をいくつかの要素に分けて解析し、それらが当時に与えた影響と今日まで持続する意義を指摘している。

このような構成のなかに多彩な内容が盛り込まれた本書の意義として、大きく以下の2点を挙げておきたい。

1点目は、最初の1章で、アフガーニーのアフガニスタン／イランをめぐる出自の問題やスンナ派／シーア派をめぐる宗派の問題、さらに信仰／不信仰をめぐる信仰の問題について、大きく紙幅を割いて鳥瞰的に整理している点である。例えば著者は、出自問題で、アフガーニー自身の言葉、エジプト出身のアラブ人ムハンマド・アブドゥ(Ṣaḥb al-Muḥammad ‘Abduh)を筆頭とする弟子の証言、イラン人学識者やアフガン人学識者による研究、さらには東洋学者(オリエンタリスト)の議論、当時の外国の機密文書などを含めて、多様な時代と地域に及ぶ史資料を参照している。宗派の問題や信仰の問題についても同様に、多様な史資料を駆使している。これまで西洋そしてイスラーム世界では、アフガーニーに関連する言説を、生前と没後、広範な地域、賛否の両論を踏まえて概観する研究書は書かれてこなかった。本書によって初めて読者は、現代のイスラーム復興運動の思想的始祖とされるアフガーニーが、古今東西でどのように語られ表象されてきたかを一望することができる。

2点目は、1章から6章までの詳述を踏まえて、最後の7章で著者がアフガーニーの思想を解析しているところから、アフガーニー自身の思想の内実と、著者の思想的立場とが理解できる点である。著者は、アフガーニーの思想内容を、次の10項目に分類して数え上げる。(1) ヨーロッパ植民地主義への抵抗、(2) 不正や専制支配に対する革命、(3) オスマン朝スルターンを頂点とするイ

スラーム世界の統一的連帯 (一つのイスラーム=汎イスラーム主義)、(4) 狭義の学派や宗派を超越した、スンナ派とシーア派の一致団結 (ムスリムの一体性)、(5) イジュティハドの開門と盲目的なタクリドの拒絶 (イスラーム法の革新的再解釈)、(6) 理性の強調、(7) 科学的知性と宗教的知性の調和、(8) 議会における代議選挙と民衆政治へ向けた政治改革、(9) 柔軟かつ幅広い思想、(10) 人生と思想の自由闊達さ、である。ここから読者は、項目ごとに割り振られたアフガーニーの思想を全体として把握することができる。

翻って西洋におけるアフガーニー研究をみると、ギブ(Hamilton A. R. Gibb)やスミス(Wilfred C. Smith)、ホウラーニー (Albert Hourani) らによる研究は、アフガーニーを当時の時代状況に位置づけて客観的に把握し、積極的な解釈を寄せる一方[Gibb 1947; Smith 1957; Hourani 1983]、ケドゥーリー (Ellie Kedourie) やケディー (Nikki R. Keddie) らによる研究は、アフガーニーを否定的な眼差しで見つめて「政治的陰謀を目論む不信仰なテロリスト」と烙印を押し、その思想を過小に評価してきた[Kedourie 1966; Keddie 1972]。特にケディーによる大部の実証的研究がまとめられて以降、西洋ではアフガーニーを否定する考えが大きな力を持った。そのような否定的な研究に対して著者は、アフガーニーの思想を現代イスラーム主義の立場から正当に評価しようと試みる。思想内容の最初の3つとして、反植民地主義、イスラーム改革主義、汎イスラーム主義を挙げていることは、そのことを雄弁に物語っている。また、思想の第1項目に反植民地主義を掲げることで著者は、今日のイスラーム世界が欧米による帝国主義的な植民地支配の延長線上にあるという認識も示している。

こうして読者は、現代イスラーム復興の始祖たるアフガーニーの思想内容、そして彼の思想の積極的な継承を自負する現代イスラーム主義者の価値観および世界認識に出会うことができる。現代のイスラーム復興運動の始祖とされる彼の思想を解明することは、近年のイスラーム復興現象の思想的理解につながるのである。

以上のように有益な論点を提供してくれる本書に対して注文をつけるとするならば、それは最初の1章で実証的・歴史学的にアフガーニーの出自と宗派、信仰の問題を個別具体的に議論している一方、最後の7章で彼の思想の内実を普遍抽象的に解釈し、両者の間で均衡を欠いている点にある。この点において、著者と同じく現代アラブ・エジプトを代表するイスラーム復興論者ムハンマド・イマーラ (Muhammad 'Imāra) をみるならば、彼はアフガーニーの出自と宗派の問題を不問に付してしまう。現代イランを代表するイスラーム著述家ハーディー・ホスロー・シャーヒー (Hādī Khusrū Shāhī) の編纂した、全6巻からなるアフガーニー全集の第1巻に寄せた序文のなかでイマーラは、汎イスラーム主義の普遍性を勘案したとき、アフガーニーの個別的な出自や宗派を問うことは、虚しく意味はないと表明している (シャーヒーもこのことに同意している) [al-Afghānī 2002]。

また、著者がスンナ派の現代アラブ・エジプト人であることからか、「アフガーニーはスンナ派のアフガン人でアラブ世界に絶大な影響を与えた」という命題にやや拘泥しているようにもみえる。1章で、「シーア派イラン人」と「スンナ派アフガン人」という項目を対立的に並列させて後者の確実性を主張し、また7章で、その表題名「アフガーニーとアラブ性」から推測されるように、アフガーニーとアラブ性の密接な関連付けを試みている。このときに著者は、関連する史資料を事後的に選択して恣意的に選択して先の命題を証明しようとしているようにみえる。

このように、著者は実証的な歴史研究と思想史研究の狭間で揺れ動いている。しかし、このことは著者だけの問題ではなく、そもそもアフガーニー研究が大きな困難を抱えていることに由来している。

ここで、アフガーニーの研究史を徹底的に検証すればするほど、そこに解釈の対立のみならず、歴史的事実の確定すら困難な状況が横たわっていることに気づく。先にも触れたが、これまで西洋オ

リエンタリストによる一部の研究は、アフガーニーに関して高度な実証的研究を試みるものの、「政治的テロリスト」という悪意ある位置づけが先行してその思想を過小に評価してきた。他方、イスラーム世界の研究は、その思想面において高い評価を与え、彼を「敬虔な信仰者」と積極的に位置づけるものの、実証的な手続きにおいて堅実さを欠くところがあった。西洋そしてイスラーム世界双方の研究ともに、事実史と思想史の間で乖離をきたし、両者を噛みあわせた総合的なアフガーニー像を構築してこなかったといえる。著者の研究も、この問題の延長線上に位置づけて理解される必要がある。

しかし問題は、アフガーニーを批判する西洋、彼を擁護するイスラーム世界といった二項図式で説明し尽くされるものではない。出自や宗派の問題について、例えばアラブ世界やアフガニスタンは「スンナ派のアフガン人」説で一致をみせる一方、イランと一部のオリエンタリストは「シーア派のペルシャ人」説で一致をみせている。信仰の問題については、例えば近年のアラブ世界のアフガーニー研究を覗くと、イスラーム復興論者がギブやホウラーニーなどの研究と「敬虔な信仰者」という点で一致をみせる一方、リベラル左派や宗教エスタブリッシュメントは、ケディーやケドゥーリーらの研究と「不信仰者」あるいは「似非ムスリム」という点で一致をみせている。このことから、西洋そしてイスラーム世界では、アフガーニーの位置づけや賛否をめぐる様々な立場が存在し、双方それぞれが横断して複雑に交錯しているということがみてとれる。もはや西洋とイスラーム世界は、二項対立的な関係にあるのではなく、幾層にもわたって奇妙に入り組んだ関係を取り結んでいるのである。

アフガーニーはイスラーム復興の祖であるため、彼を議論の俎上にのせることは、19世紀当時の問題だけでなく、その時代を解釈する現代の問題とも結びつく。だからこそ、現代イスラーム世界を生きるユースフは、アフガーニー研究書を世に問うたのであり、この意味でアフガーニーは、極めて今日的にアクチュアルな研究テーマであり続けているのである。

従来の実証主義と思想史研究の乖離を克服してアフガーニーを等身大にみつめ、西洋とイスラーム世界の入り組んだ関係を把握して彼をめぐる言説を正確に捉えること。そのためには、地域に錯綜する知の言説力学を相対的に解明する、学際的な研究と視座が必要となってくるだろう。領域横断的な学問を謳う地域研究は、この意味で、新たなアフガーニー像を浮かび上がらせる責務を負っているといえるだろう。

参考文献

- Gibb, H. A. R. 1947. *Modern Trends in Islam*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hourani, A. 1983. *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939*. New York: Cambridge University Press.
- Keddie, N. K. 1972. *Sayyid Jamāl ad-Dīn “ al-Afghānī”: A Political Biography*. Berkeley: University of California Press.
- Kedourie, E. 1966. *Afghani and ‘Abduh: An Essay on Religious Unbelief and Political Activism in Modern Islam*. London: Cass.
- Smith, W. C. 1957. *Islam in Modern History*. Princeton: Princeton University Press.
- al-Afghānī, Jamāl al-Dīn. 2002. *al-Āthār al-Kāmila*, ed. by Sayyid Hādī Khusrū Shāhī. al-Qāhira: Maktaba al-Shurūq al-Dawliya.

(平野 淳一 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)